

小児看護学実習で看護学生が受け持ちをした子どもの家族の思い  
- 国内文献レビュー -

小代仁美

奈良県立医科大学医学部看護学科

Thoughts of families who had a child attended by a nursing student during a pediatric nursing practice:  
a Japanese literature review

Hitomi Ojira

Faculty of Nursing School of Medicine, Nara Medical University

要 旨

目的：小児看護学実習(以下 実習)で看護学生(以下 学生)が子どもの受け持ちとなり看護をすることに対する家族の思いを明らかにし、実習での教育のあり方を検討する。方法：医学中央雑誌を用い、キーワードを「小児看護学実習」として、実習で学生が受け持ちをした子どもの家族の思いに関する内容の記述のある 11 の国内文献を分析した。結果：1. 学生の受け持ちとして子どもを依頼された家族の思い、2. 学生と初対面の際の家族の思い、3. 学生の子どもへのかかわりに対する家族の思い、4. 子どもの様子に対する家族の思い、5. 学生の態度に対する家族の思い、6. 家族にとって学生の存在に対する家族の思い、7. 学生の看護技術に対する家族の思いが明らかとなった。考察：1. 学生のかかわりによる子どもの変化による家族の喜びと負担、2. 学生から家族が受ける助けと負担があり、学生に対する指導・教育のあり方、学生が子どもを受け持つ事に対する家族への説明の重要性が示唆された。

キーワード：小児看護学実習、看護学生、子どもの家族

I. はじめに

子どもは、入院することで病気や治療のみでなく、家族と離れることや慣れない病院での生活という、環境の変化によりさまざまな混乱を引き起こす(梶山ら、1988)。子どもの入院について、1959年のプラットレポートにより、病院において子どもの権利を守りながら援助することの重要性が報告された。このことより「病院における子ども憲章：European Association For Children in Hospital」が出され、子どもに家族が付き添うことや子どもに対する面会者には年齢による制限があるべきではないことなどが報告された。これらから、我が国では「小児看護領域の看護業務基準」が作成され、面会の制限、家族の付き添いについては子どもと家族の希望に応じて考慮されることなどが述べられている。そして、現在は子どもの入院に際して、

家族が付き添いをしている場合が多い。しかし家族は、子どもが入院することで、入院させてしまったという自責の念、辛い検査や治療に耐える子どもを目の当たりにして身を切られる思いでいる(今西ら、2014)。そして、子どもに付き添うことで家庭での役割が果たせない、子どものきょうだいの側にいることができない辛さや仕事を休まなければならない社会的役割に対する悩みなどを抱えている。さらに、子どもの付き添いによる身体的な負担や子どもの側を離れることができない不自由さなどさまざまな悩みを抱えながら子どもの側にいる。そのような中、子どもが、小児看護学実習(以下 実習)で病棟にきている看護学生(以下 学生)の受け持ち児となる場合がある。学生は、訪室して子どもへのかかわりをする事となるのである。

学生にとって受け持ちの子どもの家族は、子どもと同様に看護の対象者であるが、同時に子どもとかかわる際の助言や助けが得られる存在でもある。よって、実習において学生は、子どもと関係を築き、子どもへの看護の展開をすると同時に、家族とも関係を築いていかななくてはならない。しかし、看護体験の少ない学生が子どもやその家族の看護を行うには技術が十分とはいえない、尚且つ現在の学生はコミュニケーションや人とかかわることが弱いと言われている。学生に子どもを受け持たれることとなった家族にとって、子どもの療養の世話と同時に学生への気遣いをしなくてはならない状況となることが推測される。このことより家族が、学生が子どもへのかかわりや看護をすることや家族とのかかわりもすることをどのように思っているのか知る必要があると考えた。

そこで、実習で学生が受け持った子どもの家族を対象にした国内文献を検討し、学生が子どもの受け持ちとなり看護をすることに対する家族の思いを明らかにすることとした。そして、実習で学生が、家族の思いを理解した上で子どもやその家族へのかかわりができるよう、家族の負担とならないような実習となるために、教員として学生指導のあり方を検討することとした。

## II. 目的

実習で学生が子どもの受け持ちとなり看護をすることに対する家族の思いを明らかにすることとした。その結果より、実習での教育のあり方を検討することとした。

## III. 用語の定義

家族：広辞苑第六版(2008)によると、家族とは、夫婦の配偶者関係や親子・きょうだいなどの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎として成立する小集団、と定義されている。本研究においては、入院している子どもの付き添いをする家族を対象とする。よって、家族を、子どもが病気となり入院する際

に子どもに付き添い世話をする人とし、両親、祖父母、子どもの養育者とする。

## IV. 方法

医中誌 web (Ver. 5)を用いて 1977～2014年までに発表された国内論文を検索した。実習で学生が受け持ちをした子どもの家族の思いに関する文献を網羅できるようキーワードを「小児看護学実習」として検索した449件が得られた。また、ハンドサーチによって得られた文献も含め、論文の題名、抄録および本文を読み、家族を調査対象とした実習で学生が受け持ちをした子どもの家族の思いに関する内容の記述のある11件を分析対象とした。

## V. 結果

### 1. 学生の受け持ちとして子どもを依頼された家族の思い

家族は、学生が子どもの受け持ちを依頼されたことについて、若いなあ、何をする人かな、まだ学生だな、慣れていない(嶋田、2000；森ら、2012)など、心配や懸念を感じつつも、協力するのは当然だという思いと、病気の子どものでも何かの役に立ちたい、子どもの成長や付き添い生活の支援など得られるという期待(森ら、2012；中尾ら、2013)から受け持ちを同意していた。また家族自身にも、看護を学ぶ学生の友人がいる、出産の時に他の人に学生がついていていいなと思っていた、すてきな職業と思っていた、将来の看護師を育成することで社会の役に立ちたい(嶋田、2000；中尾ら、2013)、というような学生に対する好意的な認識があったことが、子どもの受け持ちとして同意した要因の一つでもあった。

一方、突然言われても戸惑う、いきなりだと心構えがないと戸惑いをみせる家族(嶋田、2000)や、心身に障害のある子どもの家族は、子どもが思ったことをすぐに言ったり、遊んだり話したりできないことで、受け持ちの子どもとして適任かと心配している家族もい

た(森ら、2012)。また、性格が暗い、勉強熱心でない学生であったら困るなどという心配も抱えていた(福井、1994)。

## 2. 学生と初対面の際の家族の思い

家族は学生と最初の出会いである挨拶の際に、学生について、優しそう、清潔感があり、ニコニコはきはきしていた、感じの良いきちんとした人、子どもを可愛がってくれそうな人、自然な感じ(嶋田、2000)と好印象を抱いていた。加えて、子どもを学生に任せることに関して、学生だから任せられないとは思わない、期待をした。看護師の指導の元で説明され勝手にするのではないとわかって安心した。教員がついていたことで安心感があった。面倒を見てくれる人と思っていた(嶋田、2000)。

## 3. 学生の子どもへのかかわりに対する家族の思い

家族は、学生の子どもへのかかわりの様子から、学生の子どもを思う接し方に満足した、子どもとしっかりかかわってくれたので不安が軽減した、誠実であり常に子どもの心を和ませる声かけをしていた、おもちゃを作ってきてくれた、遊んでくれるんだなと思って嬉しかった、穏やかな接し方で母子ともに気分が安らいだ、と学生の態度について実によくやってくれた、本当に親身になってくれた、と喜んでいて(嶋田、2000：細谷ら、2004：栗原ら、2005：森ら、2012)。また、病気療養している子どもの支援などで心身ともに疲れている家族にとって、学生の子どもに対する“かわいい”との言動により、忘れかけていた子どもの誕生を待ち望んでいた親としての希望を思い出す(野村、2004)という親としての喜びを味わう一面もみられていた。

一方、学生に対して、もっと積極的に、リラックスしてと励ましたり、子どもの人見知りが強くて学生に淋しい思いをさせたのではないかと心配したりした(福井、1994)。反面、学生個々のもつ子どもに対する苦手意識

や、人見知りをする子どもに対してコミュニケーションが上手くいかなかったことで負担を感じていた(城内ら、2007)。

## 4. 子どもの様子に対する家族の思い

家族は、学生がかかわることによる子どもの様子について、喜んでいて、表情が明るくなった、学生に慣れてきた、学生にニコニコして懐いていたので嬉しいと思った、子どものストレスがなくなってきている、というように楽しむ子どもの姿を捉え、きっと子どもも安心したと思うと感じているなど(嶋田、2000：細谷ら、2004：栗原ら、2005：阿部ら、2006：中尾ら、2013)、学生を子どもの受け持ちとして受けたことに喜びと安堵感があったと考える。

## 5. 学生の態度に対する家族の思い

家族は、学生の態度について、とても良く頑張ってくれていた、自分がない間にはきちんと子どもの相手をしてくれ安心できたなど、学生の一生懸命な姿に好印象を受けていた。また、学生が子どもの性格をぴったり言い当てたことに驚き、安心して預けられると思っていた(細谷ら、2004：栗原ら、2005)。加えて、日常的な挨拶、会話、言葉使い、同室者の気配りができている学生は子どもと良い関係を築けていると捉えていた(城内ら、2007)。

一方、家族は学生の消極的な態度や子どもの不慣れな対応に心配や戸惑いや頼りなさを感じ(嶋田、2000：栗原ら、2005：森ら、2012)、すぐに対応してくれない、学生にどこまで頼っていいのかわからない(嶋田、2000：栗原ら、2005)と不安を感じている場合もあった。

## 6. 家族にとって学生の存在に対する家族の思い

家族にとって学生は、子どもの面倒を見てくれてよかったと思った(嶋田、2000)、子どもが一人になると泣くので助かった、学生が

子どもの側にいて相手をしている間に、トイレ、洗濯、売店、銀行などの所用や、家に帰ってくるなど自分のことができる(福井、1994: 栗原ら、2005: 阿部ら、2006)、自分がない時に子どもの相手や身体拭きなどをしてくれて良かった(栗原ら、2005)、子どもと二人きりが続いて疲れるし、学生が子どもにかかわることで子どもが楽しそうにしていることに喜びと安堵感があつた(阿部ら、2006)、と家族の負担軽減への支援と子どもを安心して任せることができたことで、心配や不安が軽減したことに感謝していた(細谷ら、2004: 森ら、2012)。また、手術直後や急性期症状の強い時、検査や処置の時など、学生が側にいてくれることで、子どもも付き添いも安心できたこと(福井、1994)、学生が家族の気持ちを聞いてくれること(嶋田、2000)、学生が家族と看護師との橋渡しの役目にもなってくれたこと(栗原ら、2005)に感謝していた。

そして、学生に子どもの病状の変化を聞きたい、これからも母親の相談相手になって欲しい、受け持ち期間が短くもつと長く話したかったし、毎日会えるとよかった(嶋田、2000: 栗原ら、2005)という希望を抱いていた。

一方、家族は、ベッドサイドで休息したいときも学生が離れないでいる、大きな声の会話や笑い声は不愉快のことがあり、もう少し周りに気を遣って欲しい、母親が来ていない他の子どもにも眼をかけて欲しい(嶋田、2000: 栗原ら、2005)と思っていた。加えて、子どもの病気が急性リンパ性白血病で病状が思わしくなく子どもも家族も落ちつかない状況にあったことや入院して一週間で慣れていないこと、子どもの人見知りが激しいことなど、家族が子どものことで頭が一杯になっている時、あるいは自分の体調が優れない時は協力できないと思っており、学生に気遣いすることに負担を感じていた(福井、1994: 城内ら、2006)。また、学生が家族や

子どもに対して帰りに挨拶をしないことに不快に思っていた(嶋田、2000)。

#### 7. 学生の看護技術に対する家族の思い

家族は、学生が子どもに行う看護技術について、学生は知識や技術が未熟であり判断力も乏しい(福井、1994)と感じており、学生が子どもの世話をすることが意外と考えており(長谷川ら、1992)、食事介助、着替え、おむつ交換に関しては、学生が実施することに否定的に思っている家族が多く、清拭、洗髪については学生が実施することについて迷っている家族が多かった(長谷川ら、1992)。また、症状や状況の変化について、診療の処置については十分な判断をして対応ができないため母親にとっては良い印象は受けていないようであった(城内ら、2007)。

## VI. 考察

### 1. 学生のかかわりによる子どもの変化による家族の喜びと負担

家族は、学生のかかわりで、子どもの表情が明るくなり、楽しそうにしている様子に、子どもが辛い療養生活から癒され、楽しさや喜びを感じていると受けとめ、喜びと安堵感がみられている。子どもは、入院という環境の変化により、泣き叫ぶ、空さわざする、両親に固くしがみつくと、睡眠障害、拒食や過食などの心理的混乱状態が現れることがある(長畑ら、1970)。さらに病状の変化による子どもが受ける痛みや苦痛なども想像できる。そのような子どもの様子をみている家族の不安や心配は多大なものであったと推測される。家族は、学生のかかわりから子どもの楽しそうな様子に喜びを感じ、自身の子どもを思う苦しみや癒された安堵感と学生の受け持ちに同意する時に感じていた不安が軽減したことからの安堵感があつたと考える。

また、学生の子どものに対して可愛いと素直に感じて、子どものために何かしたいと思う誠実な態度が好印象であったと同時に、子どもを大切に思う学生の心が伝わったことが

伺える。そこには、学生個々がもつ明るさ、優しさなどの個性も含まれると考えるが、何より子どもについてよく理解して、子どもが表す思いに対するかかわりや子どもが遊ぶ遊びの工夫、実習に対して学生が前向きに努力したことの結果であると考え。

一方、家族は実習で緊張している学生の硬い表情や態度に心配していた。家族は学生が、子どもとのかかわりが上手にできていないと判断して、子どもとのかかわりを続けられるのか心配となったと考える。そこで家族は、学生に「積極的に」「リラックスして」などの助言をしていたが、逆に学生への気遣いが負担となる家族もいた。子どもとの接触体験の少ない現在の学生は、子どもとのかかわりに戸惑いを感じている。また、子どもの側にいる家族に対しても過剰意識して、自分が評価されているのではないかと家族の視線の重圧があり家族や子どもへのかかわりに戸惑いを感じている(小代ら、2010)。しかし、子どもの思いや子どもへのかかわり方などよく知っている家族は、学生にとって助けとなる存在でもある(小代ら、2009)。学生は、家族の「積極的に」「リラックスして」などの言葉に助けられたのではないかと考える。しかし、家族にとってそのことが負担と感ずる場合があることが明らかとなった。

そこで教員や指導者が、家族とコミュニケーションをとりながら関係を築き、家族の思いを把握し、学生が家族の負担要因とならないように学生や家族の間に立ち、調整を行っていく必要があると考える。

## 2. 学生から家族が受ける助けと負担

学生は、家族を自己の評価者と受けとめてしまう傾向にあり(小代ら、2010)、家族の存在を意識しすぎるがあまり、家族の表情、態度や行動を家族の学生に対する感情として敏感に受けとめる(阿部ら、2011)。そのことが、学生の緊張を高めることとなっているため、家族の休息したい思いや子どもの病状から子どものことで頭がいっぱいである家族

の心理状況に気づかない学生の言葉や行動、態度が家族に負担を与えているのではないかと考える。

しかし、学生は、家族を子どもへの支援をする協働者と捉えることで、家族の思いを理解しようとし、子どもへの援助の方法について家族から情報を得ようとする(小代ら、2009)。そして、家族から受け入れられるために、最初は一定の距離をおきながら、きちんと挨拶することや、丁寧に接することを心がけていた(藤田ら、2011)。家族の捉えた、表情が明るく、ニコニコはきはきしていた、感じの良い、という学生の態度は、家族に好印象を受けることとなったと考える。そして学生は、家族の子どもの対する愛情、子どもを支えようとする家族の姿を見て、家族の子どもに対する想像を超えた深い思いを感じとった上で、どのように家族にかかわったらよいか戸惑いを感じながら子どもや家族へのかかわりをしている(阿部ら、2011)。その家族の思いを大切にしている学生の思いが、子どもが泣くため離れることができない家族の負担軽減への支援となっていたと考える。栗原ら(2005)は、実習の目的は家族の手助けではない、と述べている。本来であれば看護師が常に子どもや家族のニーズに応じ、適切なケアをしていかなければならないが、看護師の現状を見ると、必要な時に必ずしも子どもや家族の側に看護師がいるとは限らない。そのような状況のもとで家族にとっては、学生が受け持ちとして側にいることで助けられている(福井、1994)。家族の負担軽減という看護は、小児看護では大切なことであり、学生の小児看護として学ぶこととしても重要なことではないかと考える。

一方、現在の学生は、人とかわることが弱いことが指摘されている(江本ら、2001)。このことが、家族が休息したいという思いに気づかない、大きな声で会話する、学生の笑い声に家族が不愉快に思っていることに気づかない、といった学生の態度となっていたと考える。教員や指導者は、家族の思いと学

生個々のレディネスを理解して、学生が家族の思いにそった行動ができるように指導をする必要がある。そのためには、教員や指導者が家族との人間関係を深めておく必要があるのではないか。

また、家族は、子どもと学生のコミュニケーションが上手くいかないことに対して負担を感じていた。発達途上の子どもは思いを言語で表現することが難しい、そのような子どもの思いを理解することは学生にとって困難な状況である(小代ら、2009)。そのことが学生の子どものに対して苦手意識となることや、人見知りの子どもとのコミュニケーションに苦心していることに繋がり、家族の負担となっている。教員や指導者が、学生に対して子どもにかかわるための助言、助け、関わりのモデル提示(小代ら、2010)となることで、学生の子どもの学びへと導く必要がある。

最後に、家族は子どもの受け持ちとして学生を受けることについて、突然の話であり戸惑いを感じ、学生が何をするのか、どのような学生なのかなど、さまざまな不安を抱えながら子どもの受け持ちの同意をしていた。そして、学生の行う看護技術に戸惑いも感じていた。栗原ら(2005)は、現状では、家族に対して学生の立場や実習の目的が明確に伝わっていない場合が多い、と述べている。子どもを学生の受け持ちとして子どもや家族にお願いする際に、実習目的や学生が実際行う援助技術など詳しく説明し、同意を得ることが重要と考える。

## VII. 結論

1. 実習で学生が子どもの受け持ちとなり看護をすることに対する家族の思いには、1) 学生の受け持ちとして子どもを依頼された家族の思い、2) 学生と初対面の際の家族の思い、3) 学生の子どものかかわりに対する家族の思い、4) 子どもの様子に対する家族の思い、5) 学生の態度に対する家族の思い、6) 家族にとって学生の存在に対する家族の思

い、7). 学生の看護技術に対する家族の思いが明らかとなった。

2. 学生のかかわりによる子どもの変化による家族の負担や学生から家族が受ける負担に対して、学生への指導・教育のあり方、学生が子どもを受け持つ事に対する家族への説明の重要性が示唆された。

## 分析対象文献

- 阿部美夏子、西野郁子(2006)：小児看護実習で1名の患児を継続して受け持った学生の学習効果と患児・家族にとっての意義。千葉県立衛生短期大学紀要. 25(1)：31-37.
- 森浩美、小口初枝、岡田洋子(2012)：小児看護学実習における付き添い家族の認識。日本小児看護学会誌. 21(3)：22-28.
- 栗原由子、伊藤美佐子(2005)：看護学生に受け持たれる子どもの家族は看護学生をどう見ているか—病棟看護師が行った調査の結果から—。埼玉小児医療センター医学誌. 22(2)：65-69.
- 細田京子、渡辺美穂、生須典子 他(2004)：小児看護学実習における学生の受け持ち患児および家族に及ぼす影響。群馬県立医療短期大学紀要. 11：79-89.
- 野村佳代(2004)：小児看護学実習における学生と母親の信頼関係に及ぼす影響要因の検討—学生と母親の言動と実習記録の分析から—。日本赤十字看護学会誌. 4(1)：106-114.
- 長谷川えり子、村井静子(1992)：小児看護実習における学生の実習行為に及ぼす付き添いの影響—アンケート調査から—。新見女史短期大学紀要. 13：35-56.
- 福井景子(1994)：病児を受け持つ学生に対する付き添いの意識—小児看護実習における質問紙法の記述内容から—。福井県立大学看護短期大学部紀要. 創刊号：63-74.
- 嶋田文(2000)：母親の看護学生に対する心理とそれに影響する因子—乳幼児期の病気を持つ母親を対象にした調査から—。神

- 奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録：410-417.
- 城内貴代美、熊谷江利子、高塚由香里 他 (2006)：患児の母親が看護学生について受ける印象－看護学生が受け持ちをしている児の母親としていない母親の比較－. 第37回日本看護学会論文集 小児看護：294-296.
- 城内貴代美、熊谷江利子(2007)：看護学生が受け持ちをした患児の母親に与える影響－アンケート調査－. 第38回日本看護学会論文集 小児看護：170-172.
- 中尾美代子、山本宗子、矢田昭子(2013)：看護学生の受け持ちを繰り返し引き受けた患児の母親の思いや原動力. 第43回日本看護学会論文集 小児看護：114-117.
- 文献
- 阿部裕美、佐藤佳代子、合田友美(2011)：看護学生と受持ち患児の母親との関係形成に向けた効果的支援の検討－母親とのかわりの中で困惑した場面に焦点を当てて－. 川崎医療短期大学紀要、31：21-26.
- 江本リナ、込山洋美：看護系大学における小児看護学実習の実態と今後の方向性、平成10年度文部省科学研究費助成金報告書、文部省、2001.
- 藤田千春、永田真弓、廣瀬幸美(2011)：小児看護学実習において看護学生が受け持ち児の家族との関係を築く過程、横浜看護学雑誌、4(1)：49-55.
- 福井景子(1994)：病児を受け持つ学生に対する付き添いの意識－小児看護実習における質問紙法の記述内容から－. 福井県立大学看護短期大学部紀要. 創刊号：63-74.
- 今西誠子、伊豆一郎(2014)：入院時に付き添う母親のスピチュアルペインについての一考察、中京学院大学看護学部紀要、4(1)：1-12.
- 栗原由子、伊藤美佐子(2005)：看護学生に受け持たれる子どもの家族は看護学生をどう見ているか－病棟看護師が行った調査の結果から－. 埼玉小児医療センター医学誌. 22(2)：65-69.
- Miiller,D.J.,Harris,P,J.,Wattley,L(1986)：Nursing Children Psychology Research& Practice, Harper& Row Limited/梶山祥子、鈴木敦子(1988)：病める子どものこころと看護、医学書院、東京.
- 長畑正道、渡部淳(1970)：入院児の精神衛生、医学書院、東京
- 中野綾美、田中克枝、益守かづき 他(2015)：小児看護の発達と看護、MCメディカ出版、大阪.
- 新村出(2008)：広辞苑第六版. 岩波書店、東京.
- 小代仁美、檜木野裕美(2009)：小児看護学実習において看護学生が子どもとの人間関係の形成に向けて一歩踏み出すために影響する要因. 日本小児看護学会誌、18(2)：9-15.
- 小代仁美、檜木野裕美(2010)：小児看護学実習において看護学生が子どもと関わることを躊躇させる影響要因. 日本看護研究学会雑誌、33(2)：69-76.